



# Kazé



ルヴァン便り No.4  
2012.7.10

私は毎夏、シアトルから軽井沢まで旅行して、兄弟、姉妹、姪、甥達に会うのを楽しんでいましたが、2011年私が93歳になって、身体に自信がなくなって旅行するのが大変なので、軽井沢行きは止めました。

その年の9月に、私の娘のキャロルが京都から軽井沢に行っていた時、彼女がアレンジして私とスカイプで話しました。八知も元気な顔でお話をしましたので、私は安心していました。ところが2012年2月4日に、彼が昇天されると三保ちゃんからの知らせがあって、あまり思いがけないので驚き、心から悲しみました。

今夏、ルヴァン美術館で「西村八知と文化学院」の追悼展プランをして下さった三保ちゃん。その努力に厚くお礼致します。

私は弟の八ちゃんとお話するチャンスはあまりありませんでした。私は1939年から1946年迄ヨーロッパに滞在していて、日本に帰った頃は、八知は静岡県の三島に母と一緒に疎開していました。1949年に私は渡米して以来、1960年以降、毎夏軽井沢で彼に会う僅かな時間だけでした。

八知の「ぼくの美術史散歩」を読んで、彼が美術史を良く勉強していることに感心しました。彼が学生達に面白く、分かり易くそして彼の哲学的な意見を含めて話しをしています。父、伊作が子供達伝えようとした精神を、八知が一番良く受け継いでいると思います。

八ちゃんの絵は美しい詩を歌っている様な感じを受けます。彼の性格を良く表していると思います。八知はルヴァンの風にふかれて、天に飛び去っていきました。どうぞ皆さんも八知の思い出を偲んで下さる様に、祈ります。



2011「天使」油彩

ルヴァン美術館 館長 ソノ・西村・ベガート(伊作四女)

## 西村伊作の建築を訪ねて その4

## 四方山荘(大正12/1923年完成)

今回は群馬県長野原町北軽井沢の一匡邑(いっきょうむら)にある四方山荘をご紹介します。

邑は浅間山山麓の自然豊かな森の中にあり、ここには小川も流れ、まるでメルヘンの世界にいます。大正12年の夏、この広い敷地に12戸の山荘他が自然な配置で建築され、その中の一棟が四方山荘(旧笹沼山荘)です。

邑は主婦と子供達のために計画されました。明治末から大正期にかけては雑誌「青鞥」や「赤い鳥」が発刊されるなど、女性の地位向上や子供の教育に関心が高まった時代でもありましたが、この邑は時代の先端を行く特徴ある邑でした。

山荘は、入口前に広いポーチを設け、そこから直接リビングに入るバンガロー形式で、1階は広いリビングが大半を占めその他には台所などがあります。2階は急傾斜の屋根を利用した寝室が2室あり、ここには採光のために大きな屋根窓が取られています。外観は、写真のように正面を妻側(屋根の△の方向)とし、1階部分の外壁は濃い色に着色された横板張り、2階に相当する部分は白漆喰塗で、窓枠は白くペイントされ瀟洒な洋風の姿を見せています。

屋根は完成当時はそぎ板葺という、薄くそいだ板を何重にも張重ねる素朴なものでした。当時の山荘は四方山荘の他、2棟が残りそれぞれ大切に使われています。

一匡邑は一匡社という東京帝国大学を卒業したOBらの集まりを母体とし、社は「国家と社会」と題した雑誌を戦争が厳しくなるまで発刊しました。

これらの山荘を設計した西村伊作は、大正12年当時、文化学院での教育に力を注ぐと共に、人々の求めに応じ西村建築事務所を開設し、新時代の住まいや生活近代化の必要性を訴え広く知られる存在でした。伊作には「楽しき住家」(T8)や「田園小住家」(T10)ほかに多くの著書があり、大正デモクラシーの潮流の中、新しい時代の生活を求める人々に広く読まれました。この二冊には「理想村」や「一群の家」と題した一匡邑に通じる項目があり、伊作はこのような集落の創造を人々に呼びかけています。

建築史家 田中修司



## 伊作の欧米旅行日記(3)

西村伊作が25歳(明治42、1909年)の時、欧米を旅行した際の旅日記である。横浜からナポリまではドイツの客船ルーヴイヒ号一等船室に乗船した。

明治36年に旧制中学を卒業した後、伊作は、米国帰りの医師で叔父の大石誠之助から強い影響を受け、米国の生活文化や思想に興味を持ち、誠之助の食生活改善事業「太平洋食堂」を手伝ったり、我が国最初期のバンガローを建築したりしていた。この旅行で多様な人々と議論し、欧米を実際に見て、それまでの耳学問をらのものとしていった。この船には当時東京帝大助教授で物理学者の寺田寅彦らもドイツ留学のため乗船していた。本日記(1)で紹介したように長崎を出帆してすぐ寺田らと親交を結び、シンガポールやコロomboで上陸した際には行動を共にしている。このような伊作の積極性も興味深い。

なお、原文は公開することを想定したものではないので走り書きに近い文章である。それ故、不備な点も見られるが、その点は斟酌してお読みいただきたい。文中の〇〇は判読不能な箇所。句読点は筆者が加筆した。

### ●明治42(1909)年4月13日

午後二時半頃ペナンへ付いた。棧橋へ横付である。船の医者に足の出来ものを見て貰ふた。色々薬をもらい、これには後で金を払はんらんののであるそう。

町へ出て買物した。あまり立派な町ではない。ペナンは支那人町など甚臭い蓋〇どぶの水が悪いのであらう。五時頃から電車で支那の寺へ行つた。八〇もあるといふ椰子の林の中を長い間走つた。支那の寺は山の腹にあり見はらしのよい所であるが寺の建築がセメント細工で赤青金の強い色が〇〇し、どこにもさびたる点がなく我国のすすびたる寺をみつけたものには実にいやらしく感ずる。寺の者が記名簿をもつて来て其下へ寄付の金を書かせる。皆弗3とか弗5とか書いてある故仕方なしに弗1を払つた。そして案内をして貰つてゐる間に日は全く〇〇てしまつて急いで下つた時に電車は出てしまつた。そして次の車をまつ間が実に心配でならなんだ。四方は森であるし港迄は数里もあるし、熱帯で其上〇〇に一人も英語を語る人がないのである。船に帰つたらもう八時頃であつた。食堂はもうおしまい時分であつたが一皿丈け食べた。

船中の仏教学者の独逸人に〇〇質問したが彼は中々よく仏教を研究して居るらしい。この頃西洋人は大いに仏教を研究して居る。仏教は現今の科学に調和する。そして此教は神という別ものを拵へる事なく全てが自分の力でもつて自分の運命を作る。そして原因と結果の法則に従ふとひふの故科学的である。そして外の仏教者にみだの助けとか何とか人の宗教的傾向にうつたへるものは真正の宗教でないと云ふ。彼は最も科学的の現今の人が満足する宗教をとらへて居る〇宗教と云はんよりは〇〇である。

とに角、西洋人は東洋人殊に日本人が何とも思つて居らぬ東洋のものを研究してそこに全ての思いよらぬ面白い有益なものを見付けるらしい。

### ●4月14日

朝六時頃ペナンを出た。天気よろし。ペナンからは真西へ向ふのである。

ペナンからも大分人がふ江た。其中に生後六週頃の二兒を携へたものがある。母親は中々産後の姿とは思へず、達者に兒の世話をして居る。デッキの上に籠を二つ置いてミルクをのまして居る。甲板は地べたの様なものだ。それにもかかわらず平気で甲板へ〇て風にふかして居る。子供は甲板にねころんだりすはったりして居る。〇足でちつともかまはない。海は実に静である。船が動きつ様に思はぬ。

### ●4月15日

海は油の如くなめらかに鏡の如く雲の影をうつして居るが、大きなうねりの波があると見へて船は少しゆれて居る。夜甲板で面白い音楽があつた。

### ●4月16日

夕方船首の甲板に立つて風に吹かれつつ西の方を日之入るをながめた。海の色が実に奇麗であつた。二兒を保育して居る印度の黒い女はよく英語を話す。独逸や英国へ行つた事があると云ふ。もう大分年よりである。もう英国へ行きたくないと云ふて居る。

### ●4月18日

朝起きるともうコロomboの港内にはいつて居る。こゝは波止場で港を拵へてある。波の高い時は波が土手に当たつて数十尺も泡を飛ばして上ると云ふが今日は甚静である。

船は棧橋に横付にはならぬ。ボートが船の周りに〇〇来るがあれは乗ると一人二十五〇とられる故、会社のランチで上陸した。上陸するところの棧橋は二階作りで上ではこしかけあり休んだりすゝんだり出来、乗り降りには下するのである。棧橋から門をくつて出、馬車をすゝめる紺の上着を着たガイドが来て案内しやうと云ふ。

馬車がハルピーでガイドが三ルピーの約束で〇を乗り廻してして見た。ここから七哩もあると云ふ所の寺へ行つて見た。ケラニー河と云ふのを渡つてから〇に〇〇入るのである。寺は二千年前からのものだと云ふ健〇決して大きくない。おぢいさんが案内してくれた。熱で元気がないとひひつゝそろそろと案内した。子供が多くつて来る。傘をもつてやらうと云ふやつもある。馬車が走つて居る間にも子供と云ふ子供が、我々を見ると直ちに手を出して物をくれと云う〇〇〇が少しもはぢではないのと見へる。ボダイ樹を有難がるのだと云ふて〇つてある。その葉を数枚とつて本にはさんで置けと云ふ故、とつて置いた。

お堂の内は金色で像が色々あり壁には○佛像の様なものが一杯かいてある。

花を皿に入れて売りに来て、そして買ふて仏像に奉れと云ふ。仏像は多くは石で造つてあるらしい。一番大きなものは花崗岩だと云ふ。二千年もたつたと云ふても縁は時々塗りかへられるものと見へて新しい。日本のように寺といふものは古色蒼然たるものと思ふと間違だ。その外に塔があるが入る事は出来ず入口もないと云ふ。寺を出てからしゆろの木の葉に書いた経文を買た。それはしゆろの葉に針で書いて後で黒を一面にぬつた上洗ふと字だけが黒が入つて残り外は元の如く白くなるのだと云ふ。○の大字であつた。暑い日の照る中を馬車で走り○はり、案内者に色々と説明をさせた。ピクトリアパークの茶屋とも云ふ可き所でレモンスクオツシのみ、一休みして町へかへり印度人の店で宝石をひやかし、少し買わされた。宝石は甚廉いにせ物も多いのであるそうだ。船へ売りにくるのは皆硝子であるそうだ。

ここはもう支那人は少なく一番多いのはシンガリーと称する種族とムーアとである。車夫もホテルのボーイも案内者も皆、印度人である。彼等の多くは英語がよく分かる。シンガポール以前の港は土語を使はなければ○○○○のものに通ぜぬが、こゝは大抵のものは英語が分かるらしい。印度人の宝石店に日本語を話すやつがある。日本へ一度も来た事がないと云ふのに一寸うまく話す。そして日本人の名刺を多くもちて○枚以上ももつて居る。それには色々証明付きである。此者は頑固なりと書いたが多い。○見せて自分の信用を得やうとするのだ。

グランドオリエンタルホテルと云ふ所で昼食をした。コロンボ第一のホテルであると云ふ。但しやすくない金をとる。船は午後五時コロンボを出発。又西へ西へと一週計り走るのである。

## ●4月19日

コロンボから我室へ一人の客が来て、今まで一人で占領した部屋が二人になつた。其人は米国人で○○業。名はMorganと云ふが京都の芸者をひかしたのとはちがう。昨年夏から国を出て日本、支那、南洋諸島、印度を旅行したと云ふ。猟が好きでこれから垂○で船を換え亜沸利加に向ふのであると彼地て猟をするのだそうだ。ルーズベルトが行つている方へ行くのだと云ふ。彼は北極などへも行つた事があり探検好きの人と見へる。

彼は日本を評して色々と云ふて居る。第一、日本は朝鮮や台湾に植民しやうとするが本国は少しも開かずにすてある。なぜならば日本の土地の利用されて田畑山林となつて居るところは少しかない。七割○は荒地である。そして百姓はくはでちよいちよいと畑をせいつて居て、少しも大仕掛にやらない。も少し日本の農業を改良し○の山には畜類を多く養へ草がよくないならば草を刈り去り焼き○でよい牧草も植へよ。北海道などの如きよい土地をほつちらかしてある実においしい事だと云ふ。牧畜をするのが一番だ。日本は軍艦や軍隊に大きな金を入れて殖産農業に少しも心を置かぬ。軍艦一隻作る金を農業改良事業に費し、その産物を発○し家畜を買ふて百姓へやすく売つたら、その方がいくら日本の利益か分らぬと云ふ。

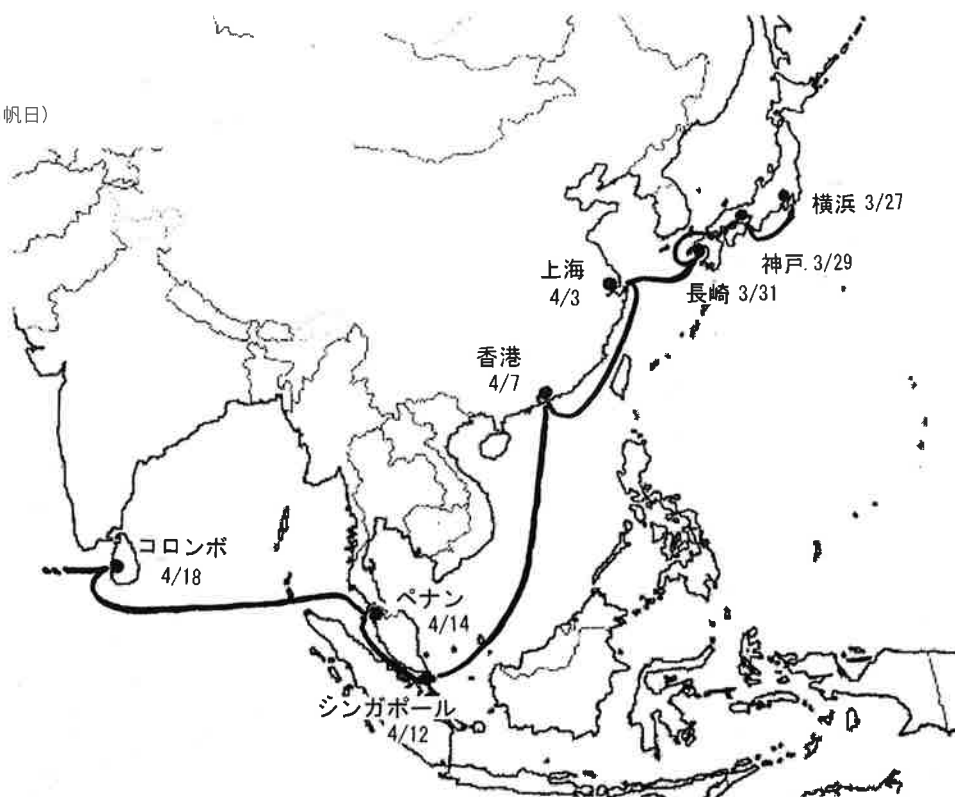
それから日本人は外人と交り○い。容易に話しをせぬ。つんとして居る。あれではいけないと云ふ。それから日本の女はあの様に無教育で圧制せられて居つてはいかぬ。女子が最も子孫に感化を与へるもの故、女を教化せざれば子孫が江らくならぬと云ふ。

彼は二ヶ月の間に日本の南北北海道の奥迄見た。そしてちやんと日本に対する文化評をもつて居る。日本へ帰つたら日本の人に此説をきかしてやれと云ふ。もう多くの書物に書きその説を云ふと云つたら、いやそれを实地に説明して尚○日本中にそれを知らず様にせねばいかぬ。もう前に人がその説をなしたらば君はそれを助けてそれを实地に行はす様にせねばいかぬ。直ちにとは云わない。長い事の改良であるから怠つてはならぬと云ふ。一向有難く感服仕らぬが彼の自信のあるのが面白い。

伊作 欧米旅日記による航路図

明治42年3月27日～ (本図の日付は出帆日)

乗船船舶：ドイツ客船 ルードヴィヒ号



## 2012年度 ルヴァン美術館のご案内

6月9日(土)～11月4日(日) 2012年

10:00～17:00

水曜日休館(7月15日～9月15日は無休)

### 常設展： 「西村伊作 楽しみの為にする仕事」

西村伊作は楽しみの為にする仕事を生涯の仕事とした。  
絵を描き、陶芸を作り、建築や家具、洋服のデザインをし、  
「生活を芸術として」の思想に基づいて生活の質を高め、  
創造的に生きる事を目指した。

### 「西村伊作の陶芸」

### 企画展： 追悼展「西村八知と文化学院」

1997年に軽井沢に私財を投じてルヴァン美術館を創設し、文化学院の「夢と風の思想」を世に送る為に館長として携わり、1988年から19年間、文化学院の校長として、そのユニークな存在で学生達に愛された八知先生が、2012年2月4日に天に召されました。



### ルヴァン サマーコンサート

- ①近藤和花 ピアノコンサート 8月11日(土)
  - ②ボサノバ/サパトスコンサート(木村 純・三四郎) 8月18日(土)
  - ③一噌幸弘(能楽・篠笛・角笛・リコーダー 他)・壺井彰久 8月25日(土)
  - ④ギター&ヴァイオリン デュオコンサート 9月 1日(土)  
(上田浩司/カレン・イスラエリアン)
- 18:00開場 18:30開演 ¥3,000(ワンドリンク付き)  
③④は軽井沢ペット福祉協会チャリティコンサート

●コンサートのお申込みは、ルヴァン美術館 0267-46-1911 へ

### 第9回 秋のアートフェスティバル

スケッチ大会、体験教室 10:00～17:00 9月22日(土)  
入場無料  
\*美術館展示説明会 13:00～

☆カフェテラス Cafe Le Vent、ミュージアムショップ Le Ventは、常時ご利用いただけます。

ルヴァン美術館：〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢957-10 Tel.: 0267-46-1911 Fax.: 0267-46-1910  
東京事務所：〒107-0052 港区赤坂9-6-14 Tel. & Fax.: 03-3401-8896 <http://www.levent.or.jp>